［報 告］

いかなる言葉で語るか〜キリスト教主義学校において〜

阿久戸義愛

今回の教職研修セミナーの全体テーマは「教会と説教，伝道のできる説教を目指して」である。教会と説教という主題については，共に登壇された佐藤司郎先生，瀬谷寛先生の御講演を通じて，十分に議論を深めることができたと思うが，本講では，教会とはまた別の「伝道のフロンティア」としてのキリスト教主義学校における語りを主題としたいと思う。

キリスト教学校は，「ミッション・スクール」という呼び名のように，ミッション，伝道が使命として与えられている。そしてそのミッションには，瀬谷先生と佐藤先生が語られた「礼拝」，すなわち学校礼拝と説教が，その中心になくてはならない。しかしまた，聖書科･宗教科（以下，「宗教科」で統一）の授業や，学校全体の活動もまた，広義の「伝道」であるべきである。ここで，宗教科が果たすべき伝道の業について，幾つか考察を深めてみたい。

今日，私たちが向き合わなくてはならない宗教科を取り巻く課題は，様々である。それを内的･外的という区分で考察したいと思う。「内的」には，生徒は宗教科で何を学ぶのか，また我々教師ははいかにそれに関わるのか，本日の演題にも挙げた「いかなる言葉で語るのか」という問題がそれにあたる。これは後に取り上げたいと思う。「外的」なものとしては，昨今の文科省・中央教育審議会（中教審）の答申にある，二つの大きな課題が挙げられる。一つは「道徳」の教科化の問題，そしてまた一つは，小中学校全教科へのアクティブ・ラーニングの導入である。これはどちらの問題に触れるとしても時間が足りないほど大きな課題である。しかし差し当って，ここで短く私の考えを述べさせていただくならば，道徳の教科化については，宗教科としては，対応しなくてはならないことはあるが，そこまで大きな問題にはならないと考える。それは，道徳の教科化と言っても，国語や社会のように新たな科目として扱われるのではなく，「特別の教科　道徳」として，一種の総合的学習の時間に相当するようなかたちで行われるものである，と差し当たって現在の中教審答申にはあるからである（もちろん，今後の動きについては細心の注意を払わなくては

ならない)。新たに「道徳」の教師免許が出されるわけではなく，合否判定の評価がつけられることにはなるが，これについては中教審もかなり慎重に言葉を選んで説明をしている。

「道徳」教科の目標として，現行の学習指導要領は以下の視点を持たせることを挙げている。

道徳的価値の四つの視点

(1)　主として自分自身に関すること

(2)　主として人との関わりに関すること

(3)　主として集団や社会との関わりに関すること

(4)　主として生命や自然，崇高なものとのかかわりに関すること

これらをひとつひとつ見てみると，これは宗教科がその役割を担うことが十分に可能な視点である。聖書を通じて，自分と他者にかかわること，崇高なものとの交わり，社会・共同体的な視点をもつこと。これらはいずれも聖書がのべ伝えていることである。

また，教える内容についての具体的例も以下のようなものが挙げられている（やはり幾つかの点については問題があるが)。

・いじめの問題　（人間の弱さや愚かさを踏まえて困難に立ち向かう強さや気高さを培う）
・生命を尊重する精神を育む
・社会を構成する一員としての主体的な生き方に関わること
・規範意識，法などのルールに関する思考力や判断力
・グローバル化の中で自国の伝統や文化への深い理解
・多様性の尊重や価値観の異なる他者との共生
・情報モラルや生命倫理などの現代的課題の扱い

おそらく一般の学校では，これらの課題についてどのように教えるべきか悩むところであろう。しかし，これらのトピックスはむしろ宗教科および聖書科教員の強みを活かすことができるものである。単なる聖書の教え込みに終始するのではなく，聖書を通してひろい問題意識をもって授業を構成することは，聖書科を担当する教員は常に意識しなくてはならないことである。

一方で，これらに対応するにあたっての課題としては以下の点が挙げられる。

・検定教科書の導入を強く進められている点
・特定の教員だけでなく，学校全体としての取り組みがもとめられている点
・単位の読み替え等についてはまだ明確なことがわからない点

検定教科書を導入については，各学校やキリスト教主義学校全体として独自のテキストを作成するなどの対応が必要となるだろう。また，特定の教員（宗教科教員）だけでなく，複数教員での道徳科目担当を求められている点も，宗教科一教科に留まらず学校全体での取り組みを考える必要がある。

幾つかの課題があるが，いずれにしても，すでに宗教科が日常的に取り組んでいる内容だと言っても過言ではなく，現代社会の問題を聖書を通じて見る，という宗教科の内容を改めて見直す機会であると言ってもよいかもしれない。

しかし，アクティブ・ラーニングの導入については，若干厄介な内容を含んでいる。2016 年 8 月に出た中教審の答申（これは次期学習指導要領に関する内容であった）では，特に英語科などを中心に，全科目でアクティブ・ラーニングを導入することを求めている。しかも，習得する知識量を減らすことなく，そうするべきであると言われている。アクティブ・ラーニングを実施すれば，授業時間内に教員が伝達できる情報量は減る傾向があるため，生徒・学生に事前学習を求めることになる。事前の自学学習にふさわしい教材等の準備が必要になる。また，アクティブ・ラーニングは「問題発見・解決型」の学習であると言える。それはたとえば聖書教育のような学習にはあまり適さない。ただ，厳密にはアクティブ・ラーニングとは言えないかもしれないが，単なる知識伝達型ではない，グループワーク，フィールドワークや，ヴィジュアル資料を用いた反転学習なども可能であろう。

宗教科でのアクティブ・ラーニングは難しいと述べたが，ひとつ，私が考える，「深い学び」のモデルケースがある。それは，林竹二の「人間について」という授業である。林竹二は，1906 年生まれ，1925 年に東北学院の師範科に在籍し，卒業後に一年間，東北学院中学部の英語非常勤講師を務めた後，東北大学の哲学科に入学し，ソクラテス・プラトン研究を修めている。その後，教育学者として特に各地の小学校で出張授業を行い，独自の教育手法が注目された。たとえば，小学生を対象に行った授業で野生児アマラとカマラ，あるいはビーバーと人間の違いなどを教材として提示し，「人間とは何か」という深い問いを児童に投げかけている。林氏の授業はグループ現代により映像化もされ，写真集も出

ている。グループ現代が撮影した映像を見ると，授業内容自体も素晴らしいのであるが，特にこの撮影スタッフが生徒達の「目」を意識して撮影していることに気づく。林先生が生徒達に何度も問いかけ，生徒は必死に考える。先生から問いかけ，生徒が答えるというかたちは厳密にはアクティブ・ラーニングとは言えないが，それでも映像が映し出している生徒たちの「目」を見るとき，生徒達がどれだけ深く集中して学びに入り込んでいるかを物語っています。深い集中の中で生徒ひとりひとりが自ら「気づき」に導かれていく体験は，アクティブ・ラーニングのみが唯一の答えではない，ということの証左である。先に聖書教育においては問題発見・解決型のアクティブ・ラーニングは難しく，知識伝達型・誘導型の学習にならざるを得ないところがあると述べたが，それでも，生徒達ひとりひとりへの問いかけや，身近な素材などを用いることなどによって，アクティブ・ラーニング以上の学習効果を挙げることも可能であろう。他方，教員は常に，独りよがりの一方的な語りに終始していないかどうか，常に自らを省みる必要がある。

以上，特に文科省・中教審答申にある，宗教科に影響があるであろう改革要望について見ることを通じて，宗教科の外的な課題を見てきた。次に，宗教科の内的な課題を見てみたいと思う。そもそも宗教科で，私たちは何を，どのように語るべきなのか。

私は主にカール・バルトの神学を研究しているが，バルト神学からいわゆる「教育論」を描くことは，難しいと言わざるを得ない。バルトにとっては一般教育（公教育）は，人間中心主義の焼き直しとなる傾向があるものであり，キリスト教的ヒューマニズム，市民的教育，近代的自我による世界の把握といったものはすべて人間中心主義に根ざしたものである。バルトにおいて人間は第一義的に神との契約のうちに存在する。人間はいっさいのものを命名する主格としての存在ではなく，神によって呼ばれる対格としての存在である。したがって，創造者のうちに参与する被造物である人間は，啓示の光，聖書を通じて世界や人間を理解しようとすることが必要である。公教育はヒューマニズムを基礎としている点で，公教育に否定的，もしくは相対的価値しか認めない立場とならざるを得ない。

バルト神学から，「教育論」を語るとしたら，このようなことになるであろう。なお，小樋井滋『バルト神学と宗教教育』（ヨルダン社，1996）のようにバルトが宗教教育の価値を認めているということを強く肯定的に語ろうとする研究もあるが，私としては，そこまで無理にバルト神学に宗教教育の意義を語らせなくてもよいのではないかと思っている。ただ，バルトの警告を真剣に受け止めたいとも思う。我々の教育が，人間中心主義に陥らないために，聖書や年号の暗記といった知識の教え込みではなく，福音が我々を捉えていくように促すことが理想である。それは知識や一般常識といった，いわば存在論なイ

デアに対して類比的になるのではなく，信仰という点に類比的になっていくことを究極的には目指すということを意味する。具体的にはそれは，聖書を自らの問題として味わうという信仰の原点に生徒を導いていくというミニストリー，伝道の課題に直結していると言える。

以上のようなバルトの忠告を踏まえつつ，宗教科教員に必要な能力について考察してみたいと思う。これは中高の教員に限らず，恐らくは大学で「キリスト教学」のような科目を担当する教員にも求められている能力として，自戒を込めての考察となる。

私は宗教科教員に求められる能力を「キリストの三職務」に対応させて考えている。すなわち，預言者として，祭司として，王としての宗教科教員ということになる。

(1)　預言者的務め

まず，当然ながら聖書教育・信仰教育を行う能力である。これは，キリスト教の基礎知識を教える力に留まらない。教員には，単なる抽象論・建前論ではなく，実社会の問題を聖書の問題との関連から具体的に考え，読み解く力が求められる。聖書から人間の問題を考えることが聖書教育の本質である。従ってそれは実践神学の問題であり，キリスト教人間学の問題である。

(2)　祭司的務め

次に，宗教主任として日々の宗教行事を司り，固有の伝統を持つキリスト教学校の秩序を保つ能力が求められる。これには日常を守っていく祭司職としての「法」感覚が必要である。例えば立ち居振る舞い・契約・責任といった理念を聖書（特に旧約）に学ぶことが重要である。

(3)　王的務め

最後に，牧会能力，すなわち学生・職員相談におけるカウンセリング能力である。牧会カウンセリングにおいて最も重要なことは，人がこの世を生きる上でどこにぶつかり何に悩むかについての感受性を，聖書を通して磨くことである。そして聖書のメッセージを通し，自分が神に愛されているという実感を得，問題に立ち向かう勇気を得させることが肝要である。

これらの三職務に対応した教員能力を養うために，以下の様な学びが考えられる。

6

まず聖書から現実社会やヒューマニズムの問題を読み解くキリスト教人間学である。例えばフランクル・ブーバー・モルトマンなどの思想や実践神学の立場を学ぶことが，現代世界の諸問題を扱っていく上で必要な知識となるだろう。

また，責任・権利・人格といった観念についての法感覚を養う観点から，現代倫理学や，パネンベルクや契約神学等の神学理解がそれに寄与するであろう。

そして，人が生きる上で体験する痛みや挫折にどのように立ち向かうかについて，聖書の人間像から学び，バルトが強調したキリスト教的愛の立場に立つことが肝要である。

宗教教育は教え込み教育ではない。バルトが批判する人間中心主義の焼直しとしての宗教教育ではなく，福音が我々を捉えていくように促すことが理想である。それは，聖書を自らの問題として味わうという信仰の原点に生徒を導いていくというミニストリーの課題に直結している。以上のような能力が必要であると考え，それに応じた能力養成に寄与しうるような学びを，本学のキリスト教教育で行っている。

宗教科教員は，教会における牧師と同じく，現代社会におけるキリスト教伝道のフロンティアに立っている。その使命は非常に大きいものである。宗教科において我々は何を語るのか。キリスト教を教えることの第一義は，生徒がキリストと出会うことである。繰り返しになるが，聖書を自らの問題として味わうという信仰の原点に生徒を導いていくというミニストリーの課題，これこそが我々が宗教科で教えるべきことである。しかしその奇跡はかならずしも生徒達の在校時に起きなくてもよい。次のアインシュタインの言葉は慰めである。「教育とは学校で習ったすべてのことを忘れてしまった後に，自分の中に残るものをいう。そしてその力を社会が直面する諸問題の解決に役立たせるべく，自ら考え行動できる人間をつくることである」。キリスト教教育もまた，教員が伝えた言葉が消え去った後になお生徒に残る，キリストとの出会いの種子にこそ，本来の意義があることを，我々は謙虚に思い致さなくてはならないだろう。